「森脇忠雄君を偲んで」

平成３０年９月　阪本　一郎

森脇忠雄君との出会いは昭和３４年の春、桜が満開の箕面市新稲の丘の上にたたずむ当時の「丸善石油高等工学院」の入学式当日であり、全国から集まった新入生９８名の新たな出会いの日となりました。
学院は、全寮制で２年間寝食を共にし、勉学に、スポーツに、文化活動にと精力的に取り組んだ人生で唯一の時期でした。

学院では私が前期、彼が後期の生徒会長を務めた記憶は鮮明であり、忘れることのできない思い出となっています。

昭和３６年４月に丸善石油（株）に入社、共に中央研究所勤務を命ぜられ、彼はアスファルト開発研究に、私は高級テレフタル酸製造研究の職場に配属され、毎日のように顔を合わせる隣り合わせの職場でした。

この頃から、誰もが認める彼の卓越した多能性に加え、不思議な魅力を感じさせる人間性が芽吹き始めていた様に思われます。

のど自慢大会では、ギターの爪弾きで演歌を唄えば涙を誘い、社会人野球の応援では、当時の後楽園球場のダッグアウト上でトランボーンを吹きながらブラスバンドチームを率い、１１ＰＭのテレビ出演までする。またバレーボールを当時の社内に広め、定着させた功労者の一人であります。

どうしても忘れてはならないのは、これらの活動におけるリーダーシップとマネジメントの絶妙さです。これこそが、彼が持ち合わせた魅力ある人間性がなせる技であったといえます。

それは、コスモ石油埼玉地区交遊会の発足から組織つくりや、会員の幸せを考えた日々の諸活動、そして、将来に向けた組織の発展に多大な尽力を注ぎ貢献されたことにも裏付けられます。

そんな彼の訃報に接し、人の人生の無常さ、儚さを身に浸みて感じさせられる事態を経験させられました。

２年前、心臓弁膜症の手術をし、我が人生で初めての入院となり、弱気にな

っている私に「どうしたんや！しっかりしいや」と励ましに来てくれた彼が・・・・・・・。

　そして昨年夏、彼が音頭をとる「男の井戸端会議」で、右脇腹に出来た肉腫を摘出した経緯を面白可笑しく、元気よく大声で説明してくれたが、どうやら、それが「希少がん」の腫瘍で転移性の高いがんであることが判明し、埼玉がんセンターで治療に専念することとなりました。過去のデータが少ないがんであったために、抗がん剤の効果を見極めながらの治療を続けていたが、６月末になって「これ以上の抗がん剤の投与は、さらに副作用が厳しくなり、本人も耐え難いであろう」と、医師団の判断が下された直後の７月１０日、病院に来てほしいとの声がかかり病院に急遽伺いました。

　彼が横たわるベッドに行くと、既に彼は覚悟ができており「万一の時は、今日話すことを君に託したい」と話し始めるので「何を言っているのや、まだまだ元気を出して頑張らなきゃ」と言ったものの、今の状況から判断すると「一言も聞き漏らさず聞かざるを得ない」と心に決めました。

　この期に及んで、よくも冷静で、適格にこんな話ができるのか感服するとともに、彼の心の中を覗いてみたくなるほど非常に落ち着いて、理路整然と私が為すべきことを聞かされました。

　それから２日後の７月１２日の昼過ぎに奥様から無念のメールが届きました。

　７月１５日の通夜、１６日の告別式には、遠くからも大勢の方々がお別れ、お見送りに来ていただきました。

満７５歳とはいかにも早過ぎ、彼も極めて残念であり、まだまだやりたいことも沢山あり、思い残すこともあったろうと・・・・・・・痛恨の極みに耐えられませんが、彼が残してくれた貴重な教えを糧に、残された人生を精一杯生きていく覚悟でいます。

森脇忠雄君、どうか安らかにお眠り下さい。

合掌